

『破戒』論

——空間から読みとる「差別」について——

宮岸 洋輔

序論

『破戒』は部落差別問題を中心とした不条理な社会問題を取り上げつつ「部落民」出身の瀬川丑松が父の戒めを破るまでの葛藤を焦点に描いた小説であり、今日まで多くの研究と評価が行われてきた。その中で拙稿では、『破戒』中の物語空間に注視して主人公瀬川丑松という人物を考察していきたいと思う。その理由は、丑松の思想や行動様式が他者や空間などによる外的要素からの影響を受けて動き出す傾向にあるからである。『破戒』は、丑松が大日向の追放事件で、自分が「部落民」出身であるという秘密を改めて自覚することから始まる。その後も、猪子蓮太郎や銀之助、高柳利三郎という登場人物の言動によって、丑松は葛藤し思い悩む。あくまで、丑松の行動様式は、出生隠蔽という外的要素からの防衛を最重要任務としているという点で受身的であり、それは丑松の心情や行動が物語空間や登場人物と極めて密接な関

係にあることを示している。その意味で、丑松が空間内にとのよ
うな思いを抱き、行動したのかを考察することは有意義であると
考える。これによって、単に「丑松＝差別の被害者」という構造
を破壊し、丑松という一人の人間について考察していくことを目
指すのである。

まず、物語空間と丑松の関係について論じる前に、丑松という
人物について述べる必要がある。そのために、丑松が行った告
白という点に注目しながら丑松の人物像について述べる。

第一章 丑松の告白とは

丑松は、蓮太郎の亡骸を前にして、自分は蓮太郎のように生き
ることを本質的に望んでいたと自覚し、蓮太郎の思想に「なんと
いうまあ壮な思想だらう」と強く考えた。これは尊敬する人物
に近づく、更には今までの葛藤に終止符を打とうとする意味合い
もあつたのだろう。この翌日、丑松は教室で生徒たちに頭を下げ

て告白、その後校長や同僚の教師たちにもひざまずいて告白した。

だが、丑松の告白の性質は、蓮太郎が懺悔録で「我は穢多なり」と告白し社会からの差別と闘おうという行動とは大きく意味が異なるものとなった。何故なら、告白を選択する以前に、丑松は「新平民」であるという噂が高柳利三郎によって学校中に広まってしまい、告白するという選択肢は「利三郎の吹聴」という外的要素によって迫られていたからだ。「新平民」出身と公言して社会と戦った蓮太郎とは違い、丑松は煩悶する自己の救済措置として用いたという点で、両者同じ「告白」であつても似て非なるものとなった。更に丑松の告白の内容を注視してみる。

あ、假令私は卑しい生れでも、すくなくとも皆さんが立派な思想を御持ちなさるやうに、毎日其を心掛けて教へて上げた積りです。せめてその骨折りに免じて、今日までのことは何卒許してください。(中略) 全く、私は穢多です、調里です、不浄な人間です。

丑松は当初、不浄だと罵られ追放された大日向に対して「不浄だとはなんだ」と憤りを見せる。しかし、告白の際には「穢多」は不浄な種族だと認めている。丑松が行った告白は、教育者でありながらも「新平民」であることを隠し欺いてきたことに対する謝罪と、「新平民」出身であることを再認識する中で新たな生き

方に進むことを目指すものだった。²⁾つまりこれは、「穢多」は忌み嫌われ社会で排除される対象であることを容認しているとも言える。正確に言えば、社会的圧力による敗北からの容認である。告白し、その後社会に何らかの訴えを講じていけば、告白は「宣言」へと進化し、丑松が理想とする蓮太郎の姿に近づいたのかもしれない。だが、告白後新天地テキサスに旅立つという終幕によって、告白は社会的抗議の要因を持つことができなかったのである。³⁾丑松の告白は、あくまで自己の救済を目的とした。告白によって、今までの「虚偽の生涯」を清算し、罪意識から解放された新たな生き方に進もうとするのである。

また、考えなくてはならないのは、丑松が差別を辛くも容認している点である。丑松の告白は、教師から生徒に説くかのように部落民差別の現状について客観的に述べようとする。その上で、「生徒の机のところへ手を突ひて、詫入るやうに頭を下げ」て「新平民」は卑しいと発言する。更には、「まだ詫び足りないと思つたか、二歩三歩退却して」土下座まで行う。この発言と対応は、丑松という被差別者が「差別」を受ける中で、「差別」というものを容認し、差別的観点を保持していることを示唆しているのではないだろうか。なぜなら、丑松は前日から「他に迷惑をかけるやうに」と告白する決意と準備を行ってきた。「迷惑をかけるやうに」とはおそらく、「部落民」がどのような差別を受けてきたのかを客観的に説明した上で、自らの出生のみを打ち明けるにとどめることを言うのではないか。丑松は、告白を学校の教壇

で、かつ教師という立場で生徒達に打ち明けることを選択した。この状況で「部落民」は卑しいという発言は、生徒に教える立場上、避けなければならない。少なくとも、「部落民」出身の生徒仙太の今後の学校生活を危ぶめる発言と言えるだろう。しかし、告白の途中から「手も足も烈しく慄えて来」て冷静を失い、思わず「部落民」に対しての差別的発言を行うのである。冷静を失ったことから、この告白は丑松の明らかな主観的発言であり今まで持っていた丑松個人の本音であり、丑松が差別的観点を持つていたことを表しているといえよう。同時に、これは差別を行う立場が一方的に「差別」を形成したのではなく、丑松のように、被差別的立場の者も、「差別」という概念を容認という形で形成する一因を担うということを表すのではないか。丑松が差別的観点を持つていたとする理由に、丑松は間近に見た「新平民」に厳しい言及をしている場面がある。屠牛場で屠手に対し

いづれも紛ひのない新平民——殊に卑賤しい手合ひとみへて、特色ある皮膚の色が明白と目につく。一人一人の赤ら顔には、烙印が押当ててあると言つてもよい

という明らかに侮蔑的表現を用いている。推測するに、丑松は「新平民」出身としての自己ではなく、平民という自己から差別化を無意識ながらも行っていたのではないだろうか。これは、丑松の性質が差別的という理由からではなく、また藤村が部落差別

を人種差別と混合していたからという作者への言及でもなく、丑松が学校社会で懸命に生きる部落出身仙太には同情と思いやりを示すが、屠手場の人々には強い批評を加えることから、丑松には「新平民」としての自己と平民としての自己が混在していると考えられないだろうか。この点を立証するために、次に物語空間、天長節との関係から考察していく。

第二章 天長節と丑松との関係

「藤村は明治の時代になつてもなお差別される部落民丑松を主人公として選び、その心の悲しみを描いて日本の軍国主義天皇制にすどくせまつて行く」という評価があるように、藤村が『破戒』を日露戦争下でも執筆し、明治三九年（一九〇六年）⁴ 自費出版したという経緯からも、軍国主義天皇制が作品上にどのような描かれているかは注目すべきである。軍国主義から言えば、その性質が物語上に表れるのは「規則」と「階級」という点だろう。丑松が勤める飯山小学校では、校長が「教育は則ち規則」という方針を述べ、規則を重要視している様が描かれている。丑松は、恩給をもらえよう敬之進と共に郡司学に進言する等、敬之進を擁護する立場を取るといふ意味で「規則」に反する思想を持っていると言える。だが「階級」という視点から見れば、丑松は決して弱者ではないだろう。丑松は、小学校の教師が世間から冷たい視線でみられることを次のように述べている。

是が自分らの預つて居る生徒の父兄であるかと考へると、浅猿しくもあり、腹立たしくもあり、遽に不愉快になつてすた／＼歩き始めた

物語の中で、教師という職業は歓迎されない。「彼処へ行くのは、ありやあ何だ——む、教員か」と言つたような顔付をして、酷しい軽蔑の色を顕しているのもあつた」とあるように、勤務時の服装で歩く丑松を非難している。それは、飯山小学校に勤める教師が「さして教育の事業に興味を感ずるでもなかつた。中には児童を忌み嫌うようなものもあつた。」というような実情が世間に露見していたからだとも思われる。それに対し、丑松は、「不愉快」に感じるのである。これは、丑松が、教師という世界でひとつのキャリアに属し、教師への強い情熱を持つているからだと言える。丑松は、銀之助と同様に師範学校を卒業している。師範学校卒業生は教師ではエリートであり、検定試験を受けて正社員となつた文平、講習を済ませて準教員となつた者よりも出世する傾向にある。丑松が最高学年を受け持ち、最敬礼を行えることもこの経歴が強く関係しているだろう。そう考えると、丑松は教育界のエリートであり、単に規則を重視する校長や教育社会に對抗する立場とは言えないのである。丑松のエリート思考は銀之助の将来設計に対して「丑松も無論今の位置に満足しては居なかつた。」という発言からも、読み取ることができよう。その丑松は、教員首座という立場で天長節を迎える。

天長節は「天皇を頂点とする明治の社会体制を称え、天皇への忠誠を誓い、憧憬を抱くハレの日であり、国民にとっては重要な祝日である。「町々の軒は高く国旗を掲げ」であり、町全体が「歓喜」に包まれる。しかし、丑松のような「部落民」は本来、天長節を祝う立場ではないと作品上に綴られてゐる。「新平民」である仙太は、クラスメイトから仲間はずれにされ、「天長節ですらも、他の少年と同じやうには祝い得ない」というように、同じ日本国民として祝うことができなかつた。それにも関わらず、今まで丑松は平然と天長節を祝つてきた。それは、出生の秘密が世間に知られていなかっただけでなく、丑松の中に、平民としての自己を確立してきたということが考えられる。丑松には平民としての自己と「部落民」しての自己が複合的に内在しており、大日向事件以前まで、丑松の中では差別を受けない平民としての自己が前面に出ていた。これによつて、天長節で首座教員としての役割を見事に実行するのである。

しかし、大日向事件によつて、丑松は「新平民」としての自己が再びふくらみ始める。自分の本当の立場を再認識させられ、今までの天長節のように祝うことができなくなつた。

去年——一昨年——一昨々年——あ、未だ世の中を其ほど深く思ひ知らなかつた頃は、噴飯したくなるやうな、気楽なことばかり考へて、是大祭日を祝つていた。手袋は旧のまま、色は褪めたが変らずにある。其から見ると、人の精神の

内部の光景の移り変わることは。是から将来の自分の生涯はつまりどうなる——誰が知らう。来年の天長節は——いや、来年のことは措みて、明日のこと宿直ですらも。

ここまで、思い悩ませる要因には、大日向追放事件だけでなく天長節直前に知った蓮太郎の訃報が挙げられる。丑松は、式の前に新聞で蓮太郎の病気が重くなったことを知る。生き方の師として慕う蓮太郎の病気の悪化は、丑松に「悲痛」と「同情」を与えらる。しかし、丑松を悩ませる理由はそれだけでなく、自らの「新平民」としての立場を思い知らされたからに他ならない。丑松は蓮太郎に対して「あ、先輩の胸中に燃へる火は、世を焼くよりも前に、自分の身体を焼き尽してしまうだらう。」という感情を抱く。これは、差別を受けながらも、社会と闘い生きてきた激動の蓮太郎の生き方に同情を示すなかも、自らの憧憬する生き方を悲観するものであり、同時に丑松自身の「新平民」としての立場を思い知らされているのである。天長節は、これまで首座教員として最敬礼をも行う立場を振る舞ってきた平民としての自己と、本来の「新平民」としての自己また出生の秘密を隠し仲間や生徒を欺きながら生きてきたことへの罪悪感とで、揺れ動く場面であり、丑松の葛藤を強く促す役割を担っている。

『破戒』は、十月二十六日の蓮華寺引越しから雪の飯山を脱出する一二月三日までの三九日間までの物語であり、その中で天長節は十一月三日という日付で行われる。この日は、風間敬之進退

職のために開いた茶会、当直先で丑松の父親の聲が聞こえるという事件が起こり、ひととき多くの内容が書かれている。なぜ天長節の日に、このような出来事が起こったのかを考える必要がある。その際、天長節後に行われた遊戯でのテニスで、仲間から見捨てられた「新平民」の仙太、没落士族で、仕方なく教師という仕事に就き、その教師においても没落していく敬之進、また丑松の父親といった社会的弱者を描いていることも注目しなくてはならない。この天長節では、「歓喜」と差別・没落に苦しむ人たちの「悲痛」が対置していると考えられる。天長節が綴られる第五章は、十一月三日の朝から、冬の訪れを感じさせる大霜の様子が描かれる。蓮華寺で、志保と会って会話をし、敬之進の悲痛な暮らしぶり・立場を思い知らされる。華やかな式典の前に、風間一族のつらい現実について考えられるのである。更に、前述したように、新聞で猪子蓮太郎の病状の悪化の報せも聞いている。天長節が終わった後も、運動場で行われているテニスで、仲間から見捨てられた「新平民」の仙太が登場し、「新平民」が天長節を祝うことができないう現実を描き、丑松が父親の声を聞くという内容も、丑松が父からの戒めを再確認すると同時に、自らの「新平民」としての自己を呼び起こす契機にもなっている。

明治から天皇制となり、明治四年に解放令によって「穢多・非人」という被差別部落民も解放されることとなった。しかし、実際には「新平民」という新しい差別用語の台頭によって以前と同様の差別が残ったのである。このような近代天皇下の社会的矛盾

は天長節の前後に用意され、「悲痛」に苦しむ人々を描き出した。これによって、平和と国家、天皇を称え、祝うことで生じる「歓喜」と、虐げられた者をもつ「悲痛」を対比させることで、丑松の苦悩はより顕著となる結果となった。自らの「新平民」としての自己が表出したことで、丑松も敬之進や仙太郎と同様、明治近代の犠牲者としての一面が表出するのである。しかし、ここで注目しなくてはならないのは、去年まで丑松は天長節を何も考へることなく祝っていたことである。昔から猪子蓮太郎の著書は購入したことから、「部落民」という身分について興味はあっただろうが、自分が「新平民」出身であるから祝って大丈夫なのかという不安は一切ないのである。ここから言えることは、丑松は平民としての自己を獲得し、被差別部落者を傍観視する立場を持つていたといえる。現に、「寂しさうに壁に倚凭つて」仲間とないじめない仙太に、「勇気を出せ、懼れるな」と励まそうとするも、周りの目を気にして「遁げるやうにして、少年の群を離れた」として、仙太を正面から庇うことができない。テニスではペアを組み、仙太を庇うも、後に

丑松は自分を責めずには居られなかつたのである。蓮太郎——大日向——其から仙太、こう聯想した時は、猜疑と恐怖とで戦慄えるやうになつた。

と後悔している。あくまで、自分の出生に関して思い悩むだけで

あり、「新平民」を救いたいという思いは父からの戒めで消されているのだ。この天長節の空間では、丑松は平民としての自己と「新平民」としての自己の葛藤が描かれ、天皇制の犠牲者的性質を宿していることを注視するだけでなく、これまでの丑松の部落民に対しての対応や考え方を考慮した上で、その明治近代性に組み込まれていきながら、一方では丑松が「差別者」としての役割を担っていたことも理解しなくてはならないだろう。

結 論

これまで、天長節という物語空間から主人公丑松について考察を進めてきた。ここで垣間見えたのは、「新平民」としての自己と、平民としての自己からなる差別的行為である。考へるに、『破戒』を読む際、丑松を「部落民」での社会的弱者であるという認識の前に、ある一人の人間としてこの作品を読み進めるべきではなからうか。多くの論文で、「部落民」である丑松の告白への葛藤について、また丑松の告白が社会的意義を伴うかどうかについて論じられてきた。丑松は「部落民」であるという設定のため、我々は読む中で「部落民」は差別を受けているから丑松に同情するという感情が芽生える。しかし、それによって丑松が本来持っている、いや人間が本来持っているエゴイズムについて見落としていたのではなからうか。丑松は「部落民」でありながら、同じ「部落民」について侮蔑的表現を用いていることは前に

述べた。テキサスに旅立つことも、叔父や父親の犠牲を元に行っていることを考えると、身勝手な旅立ちと言えるかもしれない。しかし、人間は様々な欲求と多くの犠牲によって生きることを選んでいると考えるのであれば、丑松の行動もその人間の行動形式に沿ったものであり、決して非難できるものではないだろう。丑松という一人の人間の判断と行動を考えることが、人間として差別について考えることにつながる。その時、差別という問題が差別の被害者と加害者、傍観者と簡単に割り振ることはできず、被害者も加害者の側面を持ち、加害者も被害者となりうるといういかに複雑な問題であるかをわれわれ読み手は知るのではないだろうか。そう考えると、『破戒』という作品が、現代に読まれていく意義は大いにあると思えてならない。

注

- (1) 更にこの後、丑松がテキサスに行くという結末によって、丑松の告白が自らの救済としての役割を強めることにもなる。
- (2) ここで言う「新たな生き方」とは、丑松が破戒への葛藤を終えた生き方であり、蓮太郎のような、告白後不条理な社会と闘おうという生き方を示すものではない。あくまで、丑松の告白は破戒に関する苦しみや悩みからの解放を目指すものとして捉える。
- (3) しかし、これは作者島崎藤村の思惑であったと考え

る。藤村は「融和問題と文芸」（融和時報）一九二八年一月の中で、物語を「破戒」という自己の内面を描くことに焦点を絞ったことを語っている。その意味で、丑松の告白に社会への批判性が備わっていないのは間違いない。

(4) 野間宏「破戒」について（岩波文庫『破戒』一九六八年八月）

引用・参考文献

- 佐々木徹・福田清人『島崎藤村』（清水書院 一九六六年四月）
- 平岡敏夫・剣持武彦『島崎藤村 文明批評と詩と小説と』（双文社 一九九六年一〇月）
- 柏原祐泉『仏教と部落差別 その歴史と今日』（部落解放研究所 一九九四年八月）
- 菅孝行『天皇制国家と部落差別 現代日本の統合と排除』（明石書店 一九八七年九月）
- 佐藤三武朗『島崎藤村「破戒」に学ぶ いかにかに生きる』（双文社 二〇〇三年七月）
- 渡辺広士『島崎藤村を読み直す』（創樹社 一九九四年六月）
- 東栄蔵『破戒』の評価と部落問題（明治図書出版 一九八四年）

- 任苔均「『破戒』における零落と墮落の位相」(『島崎藤村研究』二九号 二〇〇一年九月)
- 津田潔「小説『破戒』の中の『部落』・断章―『奈落』から来た思想家・猪子蓮太郎」(『部落問題研究』一三六号 一九九六年七月)
- 津田潔「状況の中の小説『破戒』と、島崎藤村―その研究史からの素描」(『部落問題研究』一三五号 一九九六年三月)
- 川端俊英「近來の『破戒』論を批評する―作品評価をめぐって―」(『部落問題研究』一二七号 一九九六年三月)
- 津田潔「『破戒』の読み方」川端俊英「(『部落問題研究』一二九号 一九九四年二月)
- 川端俊英「『破戒』論の昨今―部落問題の観点から」(『部落問題研究』一二七号 一九九三年六月)
- 津田潔「小説『破戒』の中の『部落』―小諸から飯山まで、情感のなかの部落問題―」(『部落問題研究』一一二号 一九九一年八月)
- 渡邊巳三郎「教師としての丑松・教育小説としての『破戒』」(『破戒』をめぐって(特集)) (『部落問題研究』一一二号 一九九一年八月)
- 松澤信祐「『破戒』モデル考―市村弁護士像と木下尚江」(『文教大学国文』一九号 一九九〇年三月)
- 滝藤満義「『破戒』の位置」(『横浜国大語研究』一六号 一九九八年三月)
- 部落解放全国委員会「『破戒』初版本復原に関する声明(資料) (『破戒』における差別性について)」(『部落解放』一三五号 一九七八年九月)
- 平岡敏夫「『破戒』私論」(『東洋研究』一九七〇年六月)
- 野間宏「『破戒』について」(『岩波文庫『破戒』一九六八年八月)
- 佐古純一郎「『破戒』論序説(特集・部落解放の思想と文学)」(『部落』一二号 一九六三年一月)
- テキスト
- 『島崎藤村全集二』筑摩書房 一九八一年一月
- (みやぎし・ようすけ 二〇〇八年度本学卒業生)